

さよならのプリズム



命に寄り添って

< 3 >

変に備えて夜はジャージ姿で布団に入り、こゝろを元気に集まる孫やひ孫に元気で元気に声をそろえた。隣りの部屋で練習して来た子供たちは、戻りて来た。日増しに元気になった。おばあちゃん、ありがとう。おばあちゃん、ありがとう。おばあちゃん、ありがとう。

はなさんは二〇〇五年二月の午後、はなさんがとうとう。

俊江さんにふと言った。 * * *

「長い間ありがとうね。」「在宅ホスピスは「ありがとう」と「さよなら」が一つになるところ。次

月には美容院で髪をふじのあたりに命をつなぐ希望があるから、死は怖くないです」と内藤医師

は話す。「病院で亡くなった

人治療する選択もあって

いい。大切な人はその人

らしく、豊かな時間を過

す。花のように死にたい。

わたしが死んだらうんと

にぎやかにして。はな

さんの願い通り、通夜は家

族約二十人が葬儀場に泊

まった。「良い思い出は

かりで、お祭りみたいに

楽しくてね」と俊江さん。

みんなのおをぬらした

涙は乾き、ひ孫たちは

はしゃぐ声が表の通りまで

響いていた。

在宅ホスピス支える医師 安らかな最期手助け

内藤医師は、家で過ごしたい末期患者の体や心の痛みを和らげ、家族の中でのみとりを支える「在宅ホスピス医」だ。大学病院での研修医時

「アユが食べたいねえ」代、医師の巡回もない病室で、点滴につながれ、深夜まで好きな池波捨て置かれたように亡くなる患者たちを目の当たりにした。病気が運命だから仕方ない。でも人間的に最も恐れるのは、孤独の中の死ではないか

でも家で苦しんだらどうしよう」と不安もあったが、内藤医師は「きつと安らかにいから大丈夫よ」と笑顔で励ました。鎮痛剤で痛みは抑えら

る。俊江さんたちはおをなでて見守った。内藤医師は幼いひ孫たちを呼び集めた。「今からおばあちゃん

は天国に旅立つの。耳は聞こえるから、そばで大きな声でお話してあげ



林はなさんの遺影を手にする長女の秋原俊江さん(中央右)ら。中央は内藤いづみ医師＝甲府市の秋原さん宅

